

永観著『往生拾因』（第一章）の英訳

ロバート・F・ローズ

本論文は永観（1033-1111）の主著である『往生拾因』のうち「第一，一心称念阿弥陀仏，廣大善根故必得往生」（『往生拾因』では章分けされていないが、仮にこの部分を第一章としておく）と題された部分の英訳である。平安時代には叡山浄土教，密教浄土教，南都浄土教の三種類の浄土教の流れが存在したことが指摘されているが，永観は南都浄土教を代表する僧侶である。

『往生拾因』のなかで永観は，一心に阿弥陀仏の名号を称念することこそ浄土に往生する行であることを力説する。さらに，なぜこのような単純な行が浄土往生を可能にするか，という問いに対して，十の理由を挙げて答えている。『往生拾因』はこれら十の理由（十因）を中心に書かれているが，本論文はそれら十因の内，第一因を説く箇所（第一因）の英訳である。

永観は日本浄土教の展開のなかで大きな位置を占める源信（943-1017）と法然（1133-1212）のちょうど中間に活躍した念仏者である。そのため永観の念仏理解は，源信や法然の理解と類似するところもあれば異なる点もある。『往生要集』の著者として有名な源信は，称名念仏を重視しながらも，天台宗の止観の伝統を重んじるため，基本的に念仏を定中に阿弥陀仏を観察する，いわゆる観想念仏として捉えている。逆に法然は念仏をあくまで阿弥陀仏の名号を称えることであると主張する。永観は法然と同様に念仏を「一心に阿弥陀仏（の名号）を称念する」ことであると定義している。しかし，永観にとってこの称名念仏は，定中に入り，すべての衆生と阿弥陀仏は，法身のレベル

では同一であることを悟る手段にはかならない。この点で永観の念仏観は、源信のそれを引きついでいるといえよう。

先に述べたように、本論文は『往生拾因』の「一心称念阿弥陀仏、廣大善根故必得往生」と題された、最初の部分の英訳である。ここで永観は、阿弥陀仏の名号には、彼の如来が初発心より仏果に至るまで修した一切の功德を具足しているの、その名号を称することによって往生を得ると論じている。つまり、

弥陀の名号の中、即ち彼の如来の初発心従り乃至仏果の所有一切万行万徳、皆悉く具足して欠減することなし。唯阿弥陀一仏の功德に非ず。また十方諸仏の功德も摂す。一切の如来は阿字と離れざるを以ての故に。

(大正蔵85, 91b)

さらに、この部分の最後には教信沙弥の話が引用され、念仏を称える功德がたたえられている。

以上のように、永観の『往生拾因』は日本における浄土教の展開に大きな役割を果たした書物なので、欧米の日本仏教・日本宗教の研究者にこのテキストの重要性を知ってもらうために翻訳を行った。